令和５年度未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会（小算数）

１　目的

各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた小学校算数の授業改善及び学習評価等に関する説明・講義等を通して、小学校教員の授業力向上に資する。

２　主催　大分県教育委員会

３　期日　令和５年６月９日（金）13:30～16:25

４　場所　別府国際コンベンションセンター（ビーコンプラザ）

５　内容

（１）開会行事 大分県教育委員会あいさつ　義務教育課 課長 小野 勇一

○学習指導要領では、身の周りの多様な問題解決に役立つ資質・能力の育成を目指しており、子どもたちが、学校や授業で学んだことを実生活や実社会の中で活用することが大切。

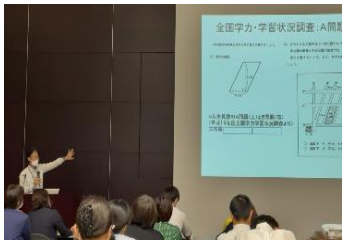
○令和４年度全国学力・学習状況調査における大分県の算数は、全国の平均正答率よりも高い結果であった。これは、新大分スタンダードを意識した授業構想や先生方のきめ細かな指導の成果だと考えている。

（２）行政説明・協議

「大分県における算数科の課題と授業改善」

〈説明者〉大分県教育庁義務教育課 指導主事 田口 昭彦

【行政説明】



○過去の全国学力・学習状況調査の問題から、算数で学んだことを活用できていない実態がうかがえる。（本県も同様）

○算数科で学んだ知識・技能を実生活の場面で活用できる資質・能力を育むためには、授業における数学的活動の充実が重要。

○各種学力調査から見られた顕著な課題として以下が挙げられる。

・四捨五入の概念や切り捨て・切り上げの方法は知っているが、目的に応じて数を大きくみたり小さくみたりするといった処理の仕方を考えること。

・面積や単位についての感覚を身に付けること。

・大分県学力定着状況調査の児童質問紙、「算数の勉強はどのくらい好きですか」では、概ね 60％でやや下降気味となっていること。

【協議】

＜視点＞「児童が自ら問題を見いだす（課題を引き受ける）ことができるようにするための授業展開」

・児童から課題を見いださせる時間を十分に確保した指導をしているか。

・解ける問題をいくつか提示した後に解けない問題を提示するなど、児童の困りを生み課題へつなぐ工夫をしているか。

・問題の解き方について、「本当にその方法でよいのか」と疑問をもたせ、問題解決の必然性を生む展開にしているか。

○今後の指導で意識することについて（まとめ）

・問題解決の必然性がある場面の設定（児童の疑問や困りから課題を設定する）

・記述内容の明確化（事実、方法、理由）

（３）講義「学習指導要領の趣旨を踏まえた算数科の授業づくりと学習評価」

＜講師＞国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官　笠井 健一 氏

○はじめに

・今やるべきことは、ベテランの先生のすばらしい授業を若い先生に見てもらうこと。
その上で、どういうことをしたからうまくいったのか、どういうことをすればもっとよくなるのかということを解説する人が必要。

・授業研究会は、授業者のみの学びで終わらないように注意し、参観した教師の学びがある研究会にしていくことが大切。

算数では苦手な児童をつくらないことが最重要課題である

○学級全体の学び合いで大切なこと

①教師が一人一人の児童を尊重すること（特に算数がわからない児童を大切にする）。

②わからない児童が何につまずいているのか教師が理解していること。

③わからない児童に対して、どのような説明ならば理解できるかを教師が知っていて、具体的に実践できること。

④児童がわかるようになるために頑張るのは教師だけではなく、教室にいる児童全員であること。

○授業展開について

・問題の答えがわかっている児童の声だけを取り上げて進めていく授業は危険。
つまずいている児童を見つけ、その児童が「あっ、そういうことね！」と納得する場面を作る授業を目指す。

・授業では、教師が説明することよりも児童への質問を増やしていくことが大切。
→わからない児童の代わりに教師が「どういうことですか？」と学級全体に問い返す
→他の児童の説明
→さらに教師が問い返す
→（この繰り返しで）学級全体が「そうか、そういうことか」と納得する場にしていく

○対話的な学びは、ペア・グループ等で話し合ったことにより新しい考えが学べていることが大切。

・話し手よりも聞き手を育てるとよい。

・小学校段階では、わからない児童にわかりやすく教えることができない児童が多くいる。

・教師の司会の下、児童が発表していき、わかりにくかった説明をわかりやすくフォローすることで、わかりやすく説明できる力を育成していくことが大切。その上で、ペア・グループ活動等を行うと対話的な学びが充実していくことが考えられる。

○算数では、C 層の児童を取り残さないように進めていくことが必須。

・授業の中で、少なくとも C 層の児童がいなくなることを目指す。

・日々、評価（主に指導の改善に生かす評価、ノートを見るのみ等）して「今日の段階で大丈夫かな？」と気になる児童を次の授業で見ていくことを続けていくことが指導と評価の一体化である。

・適応問題は 1 問でもよいのでその授業のねらいが達成できたかを見取るようにする。

○指導案の中に、児童のつまずく反応と教師の問い返し発問を書くようにすると、つまずいている児童に対応した問題解決型の授業の指導案ができるので書くようにしていくとよい。

（了）